

審査の結果の要旨

氏名 田 中 暁 子

本論文は1881年から1899年までブリュッセルの市長を務めたシャルル・ビュルスの都市整備に関する業績を子細に検討することによって、その都市美理念の具体的な内容を明らかにし、オスマンによるパリ大改造以降の西欧都市における都市整備の思想の転換を明きからにすることを目的とした論文である。

論文は研究の枠組みを述べた序章に続いて、欧州各都市における19世紀中葉のオスマン的な都市改造の概要を示した第1章、これに続くブリュッセルの状況を明きからにした第2章から第5章まで、ビュルスの都市美理念の海外への伝播を論じた第6章及び結論を述べた結論の合計8章から成っている。

序章は、序説であり、研究の背景と目的、既往研究の整理、用語の定義等をおこなっている。特にブリュッセルに現存するアーカイブを丹念にあたり、ビュルスの都市整備に関する手つかずの第一次資料を豊富に用いた研究である点に本研究の独自性があることが明らかにされている。

第1章は、オスマンによる都市整備の外科的手法を整理した後、ポスト・オスマン期に街路景観の多様性を追究する動き、有機的なデザイン採用の動き、歴史遺産保全の動きが現れることを明らかにしている。

第2章は、ビュルス以前のブリュッセル市とその郊外における都市整備の状況を明らかにした章である。オスマンの影響を受けたアンスパック市長のもとの河川の暗渠化や中央大通りの建設などが進められ、単調な市街地景観生み出された点に関して批判が集まったことが明らかにされている。

第3章は、シャルル・ビュルスの経歴とその都市美の思想をその著書や発表論文から明らかにしている。とりわけ歴史的建造物の尊重やモニュメントを強調した街路の線型デザインなどにそのポスト・オスマン的な特色を見ることが出来る点を初めて指摘した。

第4章と第5章は対をなしている。

第4章は、ビュルス市長の都市美思想が実際にブリュッセル旧市街地の都市プランにおいてどのような形で体现されているのかを、ブリュッセル旧市街の全体計画及びモンターニュ・ドゥ・ラ・クール地区の改造計画を事例として、一次資料を基に具体的に明らかにした章である。同時にこれらの施策は交通量の軽減などの実際的な要求を満たすものであったことも示されている。

第4章が都市プランを対象としたのに対して、続く第5章は、歴史的環境保全の側面に着目し、この面でビュルス市長の都市美思想が、どのような実践として結実したかを明らかにした章である。旧都心の核であるグラン・プラスを例として採り上げ、この広場を取り囲む建築群のファサードの保存と修復を実現したプロセスが明らかにされ、これらを通して広場の特徴の回復外とされていたことを示している。

第6章は、ビュルスの都市美思想がイタリア、ドイツ、アメリカの都市整備に影響を与えていった過程を実証的に明らかにした章である。国によってビュルスの都市美理念およびその技法の伝播には明確な差異があることが明示され、とりわけドイツでのビュルス思想の影響の大きさが示されている。

結論の章では、都市美思想におけるビュルスの位置づけが明らかにされている。とりわけカミロ・ジッテの思想との異同に注目し、旧市街の芸術的優位性を再獲得しようとする両者共通の問題意識に端を発しながら、個別のデザインの問題として理解し解決しようとしたジッテに対して、ビュルスはシステムとしての都市プランの段階での努力を強調し、大枠としての計画の方向性を先導しようとした点で両者には大きな差異があると結論づけている。

以上、本論文はこれまで正面から論じられることの少なかったオスマン期以降、19世紀末までの都市整備の思潮を、同じくこれまで扱われることがほとんどなかったビュルスというひとりの都市整備の責任者の都市美思想に着目して明らかにした初の論文であり、今後の都市美思想の展開過程に関する問題にも示唆を与える有用な論文であるといえる。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。